

福井県医師会

だより

第627号 平成25年(2013)9月



足羽川の花火 福井市 吉村 信

表紙写真説明：足羽川の花火

福井市 吉村 信

真夏の夜空に大玉の炸裂する花火大会のクライマックスの華やぎと、終了後の静寂さとの対比は、芭蕉の「おもしろうてやがてかなしき鶴舟哉」の句に通ずる趣きがある。

写真は、福井花火の発射場所、板垣橋^{たもと}の袂から花火を撮影したものである。空中では極彩色の花火も、発射直後は色彩が無いことを知った。並木のシルエットが花火の閃光に浮かび上がり、モノクローム調、なんとなくクリスマスを見い出させる幻想的な写真となった。

はなびえ
花火会の 終えば空満つ 星月夜^{つく}

醫 縫 録

福井県外科医会の取り組みと 肺癌検診



福井県外科医会会長 小林 弘 明

この度、本年5月の福井県外科医会総会において会長を拜命いたしました、済生会病院・呼吸器外科の小林弘明と申します。本会の長い歴史のなかで呼吸器外科医が会長を務めることは初めてのこととなります。外科を取り巻く情勢、肺癌検診の現状について述べさせていただきますと存じます。

まず新研修医制度に端を発し叫ばれて久しい医師不足ですが、麻酔科・産婦人科・小児科等では状況がかなり改善してきております。一方、外科においては深刻な状況が続き、なかなか改善傾向が見られません。初期研修において必修科目から外された影響も小さくありません。若者のマイナー科指向が進む中、福井大学においてすら入局者は多くないようです。

いろいろご意見はあるかと思いますが、外科医の魅力を私なりに考えてみます。神の手を持つ一部の外科医を除けば技量の差で患者さんの運命を変えられることは多くないかもしれませんが、それでも手術をして喜んでもらい元気に退院される、癌の場合なら元気に5年生存を迎えられる患者さんを見ることは外科医の真骨頂です。手術によって術前診断が正しかったかどうかを自分で確認できる点も大きなメリットです。外科医会ではこれまでもキッズセミナーなどを行ってきましたが、さらにこうした外科医の魅力を伝えていく努力を継続する必要があります。

先頃厚生労働省から「専門医のあり方に関する検討会の最終報告書」が公表されました。2017年度から始まる新専門医制度は、専門医の質向上をめざしプロフェッショナルオートノミー（専門家による自律性）を基盤として設計されることになっています。しかし、これまで各学会が時間をかけ知恵を絞って作り上げてきた専門医制度は根底から覆され、専門性がどれほど担保できるかは疑問です。医師の適正配置にまで踏み込むことになれば自由に専門を選べなくなる可能性も指摘されています。大病院を離れた先生方には専門医の維持は相当に困難

となります。細部についてはこれからですが、十分注視していく必要がありそうです。

さて、外科医会とは外れますが、肺癌に目を向けると今でも手術可能な例は半数以下です。肺癌検診に求められているのは進行癌もさることながら、治る段階の肺癌を多く見つけることです。ベテランの先生方には良い写真を撮影し、小さな助かる肺癌がどういう影なのかを知って読影していただくようお願いしています。一方で、最近では大病院で育った若手の先生方は放射線科医のレポートだけ見て診療し、実際の胸部X線写真など見たこともない《レポート世代》となりつつあります。大変ゆゆしき問題であり、県の肺癌専門部会では毎年何度も講習会を開催し少しずつでも精度向上に努めています。検診をX線写真でなくCTで行えば1期の肺癌がたくさん見つかることが分かっています。しかし進行癌がなかなか減らないため、死亡率減少効果については今のところ不明です。現在、福井県も参加して肺癌CT検診の有効性に関する研究が進められており、将来的には検診はCTに移行していく可能性があります。

私は呼吸器外科という外科としては大変マイナーな領域の勤務医として長く過ごしてきたため、他領域のことや開業の先生方の状況などは十分には分かりかねます。本会の運営に当たっては、顧問・理事の先生方にご相談しながら進めて参ります。外科という枠組みを超えた、さらに学術的分野を越えた幅広いテーマについて、内科医会等との積極的な連携も模索し活性化を図っていきたいと考えております。本会が先生方の交流・生涯教育の場として役立ち、ひいては県民医療の発展に寄与できますよう、絶大なるご支援を賜りますようお願い申し上げます。